

「ガリバー旅行記」と「ロビンソン・クルーソー漂流記」

三 浦 謙

- I 「ガリバー旅行記」と「ロビンソン・クルーソー漂流記」の出版当時の反響と出版迄の経過について
- II レミユエル・ガリバーとロビンソン・クルーソーについて

I 「ガリバー旅行記」と「ロビンソン・クルーソー漂流記」⁽¹⁾ の出版当時の反響と出版迄の経過について

「ガリバー旅行記」も「ロビンソン・クルーソー漂流記」も共に作者晩年の作であって、出版当初から、かなり売行がよかった。

「ガリバー旅行記」が匿名で、ロンドンの出版業社ベンジャミン・モットによって、上下二巻の形で出版されたのは、一七二六年十月廿八日、スイフト五十九才の時であった。三週間で一万部売れ、一七二六年だけで、すでに三版を重ねた。江戸時代、最大のベストセラーといわれた唐詩選が、せいぜい毎年、二三千部で、「千部振舞い」ということばがあるように、千部売れると、たいへんな売行であった十八世紀前半の日本の出版事情にくらべると、すさまじい反響という外はない。

さらに、この世に稀な冒険物語はフランス語とドイツ語に直ちに翻訳され、いくつもの週刊誌が海賊版の抜粋を掲載した。ロンドン在住のスイフトの友人たちは、この思わぬ反響ぶりを当時ダブリンにいたスイフトに競ってしらせている。スイフトと最も親しかったジョン・アーバスノット⁽²⁾

は「ガリバー旅行記」がバンヤンぐらい売れるだろうと予測し、アレキサンダー・ポープとジョン・ゲイ⁽³⁾は、身分の高下を問わず広く読まれることを確信しているといつて賞讃している。かつて、スウィフトの槍玉にあがったマルボロー老公爵夫人までもが、「ガリバー旅行記」を読んで以来、ガリバーのことが夢にまで現れるといつて激賞している。そして、官憲にきびしく糾弾されるのではないかというスウィフトの恐れも、結局は杞憂に終わった。スウィフトが数々のパンフレットを書いて政治運動していた過去の経験や、当時、当局に批判的なモノ書きが貧困はおろか投獄やさらし首になる危険があったのだから、「ガリバー旅行記」出版に先立つスウィフトの懸念は十分に根拠があった。

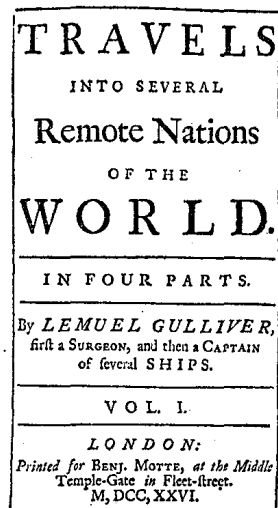
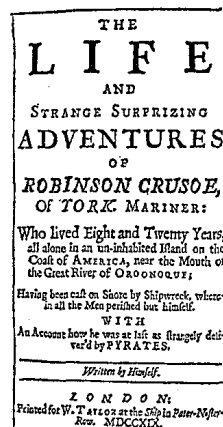
「ロビンソン・クルーソー漂流記」は一七一九年四月廿五日、ウィリアム・テイラーの手で出版された。デフォー六十才の時である。ウィリアム・テイラーは宗教書と旅行記が専門の出版業者であった。本はたちどころに売れて、五月十九日に再版が出、その年の暮れまでに、更に二版が追加された。ウィリアム・テイラーは「ロビンソン・クルーソー漂流記」の印刷と出版により、当時の金で、千ポンドの純益をあげたといわれている。一冊五シリングという、かなり高い本であったが、最初の年に四版を重ねるほど、よく売れたので、デフォーはあちらこちらから嫉妬を買った。へぼ文士とか、ありもしない話をでっち上げるホラ吹きとか、無教育な男とか、作者を嘲る声が背後でささやかれた。当時金で動く文士として知られていたチャールス・ギルドンは「ロビンソン・クルーソー漂流記」を高値で買うことは買っても、“Pilgrim’s Progress”と一緒に遺産として残そうと思うような老婆は一人もいるまいといつて愚弄した。

「ロビンソン・クルーソー漂流記」の売行きに味をしめたウィリアム・テイラーはデフォーに二つの姉妹篇を執筆させた。一つは一七一九年八月に出版された“The Furthur Adventures of Robinson Crusoe : being the Second and Last Part of his Life”であり、もう一つは一七二〇年八月に上梓された“Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe : With his vision of the An-

gelick World”である。両方とも最初の比較すると、おもしろみが薄いし、それが当時の読者の受けとりかたでもあった。“The Further Adventures”ではクルーソーを入植者として、再び島に連れ戻し、前巻と同じような冒険をクルーソーに体験させている。これは一七二〇年に二回、一七二二年に一回、増刷されただけで、売行きは思わしくなかった。“The Serious Reflections”は宗教的な冥想録風のもので、デフォーの存命中に再版が出ることもなく、一九二五年になって、ようやく第二版が日のめをみた程度で、売行きは更に芳しくなかった。

さて、一七一九年の「ロビンソン・クルーソー漂流記」の好評は、他面で、好ましくない結果を招来した。それは「ガリバー旅行記」の時のように、海賊版の誕生である。だが、海賊版といっても、必ずしも薄手の装幀のものではなかった。たとえば、当時、著作権が法的に規制されていなかったダブリンで、ジョージ・グリアソンという業者が手がけた海賊版などは、本物に負けず劣らずの立派な装幀であった。また、トーマス・コックスという業者は the Amsterdam Coffee-House piracy として知られていた縮約の海賊版をだした。これは、前述のチャールス・ギルドンが慎重に手がけたものといわれている。

一七一九年の「ロビンソン・クルーソー漂流記」が「ガリバー旅行記」と同じく匿名で出版されているのはおもしろい。初版本のタイトル・ページをみると、それぞれ、ロビンソン・クルーソーおよびレミュエル・ガリバーの自著ということになっている。



出版に踏み切る迄の事情は、デフォーのばあいは不明だが、スイフトのばあいは、ある程度判然としているので、ここに紹介する。

一七一四年八月廿四日、アン女王が死んだ直後、スイフトはロンドンからダブリンの牧師館にひっこんだ。それから六年間のスイフトの生活はほとんど知られていない。その間出版らしい出版はなかったし、手紙も当時の事情を伝えていない。だが、一七二一年四月十五日、彼は友人のチャールス・フォードにつぎのような手紙を書いている。

I am now writing a History of my Travels, which will be a large Volume, and give an Account of Countreys hitherto unknown; but they go on slowly for want of Health and Humor.

以後数年に亘って、友だちへの手紙の中で、作品の進捗ぶりにふれている。

一七二二年一月一日、ボリングブルック⁽⁴⁾はスイフト宛の手紙の中で、つぎのようにかいている。

I long to see your Travels.

一七二四年一月十九日、スイフトはフォードにこう書いている。

I have left the Country of the Horses, and am in the flying Island, where I shall not stay long and my two last Journeys will be soon over.

これでわかる通り、実際の執筆順序は第一篇から第四篇迄、かならずしも番号を追っているのではなくて、第一篇と第二篇を書き上げた後で、第四篇にかかり、第三篇が最後であったことがわかる。

一七二五年八月十四日、同じフォードに作品の完成と自信のほどをつたえている。

I have finished my Travels, and I am now transcribing them; they are admirable Things and will wonderfully mend the World.

それから六週間後の一七二五年九月廿九日、ポープにあてた手紙では、作品に自信をもちながら、上梓にあたって、出版者の勇気を期待している。

I have employed my Time (besides ditching) in finishing, correcting, amending and Transcribing my Travels, in four parts Compleat newly Augmented, and intended for the Press when the World shall deserve them, or rather when a Printer shall be found brave enough to venture his Eares ...

スウィフトが「ガリバー旅行記」の着想を得たのは一七一〇年代という説がある。アン女王統治(一七〇二～一七一四)の終り頃、スウィフトはロンドンにいて、アーバスノット、ポープ、ゲイ等と the Scriblerus Club のメンバーだった。このとき、the Memoirs of Martin Scriblerus という旅行者の諷刺風の回想記を合作で出していた。一七三〇年頃、ポープはスペンサーにあてた手紙の中で、スウィフトの「ガリバー旅行記」最初の着想はこの回想記であるといっている。また、一七一一年頃、この the Scriblerus Club の前身である the Society にスウィフトが属していた時分に、すでに、「ガリバー旅行記」の腹案があったともいわれている。したがって、一七二一年に執筆を始めたとすると、スウィフトは約十年、「ガリバー旅行記」を暖めていたことになる。そして、一七二一年から一七二五年の五年間が実際の執筆期間であった。

スウィフトは一七二六年三月上旬、ロンドンにきて五ヶ月滞在した。そのさい、「ガリバー旅行記」の原稿を携えていたが、アイルランドへ帰る数月前迄、スウィフトは出版の接衝はしなかった。八月八日、スウィフトが口述して、ゲイが筆記し、ガリバーのイトコといわれるリチャード・シムプソンなる男の署名の手紙が、ようやく当時の有力な出版業者であるベンジャミン・モットのもとに送られた。そのさい、原稿の一部を同封して、出版の意志がなければ原稿を返してほしいが、出版の意志があれば、三日以内に二百ポンド送るように、そうすれば、折返し、残りの原稿を送る旨伝え

た。八月十一日、ベンジャミン・モットから返事があった。出版は引受け
るが、そう早くは二百ポンドは出せない。残りの原稿を送れば、すぐ出版
する。そして好評だったら、半年以内に、二百ポンド送ろうというのが回
答だった。リチャード・シンプソンは八月十三日、この条件を受入れ、ス
イフトは八月十五日、ロンドンを立った。そして、十月廿八日、出版され
ると、直ちに好評をもって迎えられた。ところが、十一月、スイフトは原
文が出版社の手で勝手に五十個所に互って削除されたり改変されたりして
いるという苦情の手紙を友人チャールス・フォードに書かせている。しか
し、モットが細かな点の外は指示通り訂正しなかったので、フォードが初
版本に手を加え、全面的に原文に戻した。今日、サウス・ケンジントンの
フォスター・コレクションに収められてある、このフォードの訂正した初
版本が、一七三五年にダブリンの出版業者 ジョージ・フォークナーによ
り、スイフト全集の第三巻として出版された「ガリバー旅行記」の底本に
なっている。だが、フォークナーもモットのように政治的な配慮から、後
日、原文全体を穏健な調子に変えてしまった。このような出版社の恣意は
当時は今日にくらべ一般的だったようだが、フォークナーの手の入れかた
はモットを上廻っていたようである。したがって、the Penguin English
Libraryの「ガリバー旅行記」などは A Note on the Text で、モット
による一七二六年版の Text に倣っている点を明かにしている。

Ⅱ レミュエル・ガリバーとロビンソン・クルーソーについて

レミュエル・ガリバーとロビンソン・クルーソーは1人称で書かれたア
ドベンチュア・ストーリーである「ガリバー旅行記」と「ロビンソン・ク
ルーソー漂流記」のそれぞれ主人公の名前である。クルーソーはブレーメ
ンからヨークに移住してきたドイツ人の父とイギリス人の母の三男とし
て、一六三二年、ヨークで生れた。ガリバーは一六六一年、ノッティンガ
ムで、五人兄弟の三男として生れた。父はその土地のわずかな土地持ちで
あったというだけで、母のことは一切不明である。出生の点で、二人に共
通しているのは、中産階級の出身で三男坊であるということだ。

クルーソーは高等教育はうけなかった。父親はクルーソーを法律家にするつもりだったが、クルーソー自身は外国へ行くのが唯一つの望みであったので、一六五一年、十九才の時、父の意志に背いて家出をして、初めて航海に出る。ガリバーはクルーソーと違って高等教育をうけていた。ケンブリッジのエマニュエルカレッジで、三年間、勉強した後、オランダのライデン大学で、二年七ヶ月、医学を修めた。しかも、ライデンに赴く前、ガリバーは当時ロンドンで一流の医師であったジェイムズ・ベイツ氏のもとで、四年間、書生をしていたから、都合、六年七ヶ月ガリバーは医者勉強をしたことになる。ところが、ガリバーはベイツ医師のところで、書生をしていた時分から、クルーソーのように海外に出るのを自分の運命と考えていた。つまり、ガリバーは長い航海に出たさいに役立つためと思って医学の研鑽にはげんだのであって、ニューゲイト街の靴下屋の次女を四百ポンドの持参金つきで妻にし、ベイツ先生の力添えもあってロンドンで開業したものの、国内に留まる気はもともとなかった。

ところで、二人共、最初の航海で大きな冒険に遭遇したわけではない。クルーソーはその前に三回、航海の経験があって、その間に暴風雨にあって遭難したり、トルコの海賊船に襲われてアフリカに連行された上、奴隷にされるという辛酸もなめている。クルーソーが孤島で暮すきっかけになるのは、アフリカから逃亡して、ブラジルに渡り、農園経営に手を染めてタバコの栽培や甘蔗の植付けに成功するのだが、当時大へんな金になった黒人売買に色気を出してアフリカに渡る時である。この時は友だちの父親の船に下働きの船員として乗せてもらった最初の航海の時とは違って、船長ではないが、一応の指揮監督は任されていた。クルーソーは当時廿七才であった。ガリバーもクルーソーのようになんとか航海の経験があり、船員としてレヴァントへ赴いたり、東西インドへ出かけたりしていた。だが、その間、クルーソーのような苦い経験を味わうことはなかった。ガリバーが未知の世界にとびこむきっかけになったのは、南洋行きのカモシカ号という船に乗りこんださいで、ガリバー三十八才の時である。二人の間には十一才の年令の開きがあった。しかも、クルーソーは当時、独身であったが、

ガリバーは妻子ある身であった。クルーソーが結婚するのは、廿八年の孤島生活を終えて、五十五才で帰国した後である。この結婚で、クルーソーは二人の男の子と七人の女の子に恵まれる。

容姿についていうと、ガリバーは色白の美男(ただし、これは自称)で、身長約六フィートだが、クルーソーについては全く不明である。

個人的な資質という点では、ガリバーは語学に堪能であり、その上、なかなか器用であった。語学力があったことは、リリパットで僧侶や法官に高地ドイツ語、低地ドイツ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語、スペイン語などで話しかけるところや、六人の先生がついて三週間でリリパット語に上達して、うまく使いこなすところや、フイヌム国からの帰途、遭難して、ポルトガルの船に助けられ、船員にポルトガル語で話しかけられると、すぐさまそれに応答して、ポルトガル語は元来得意であったと自認しているところなどから、うかがい知ることができる。ところが、クルーソーは語学は弱かった。アフリカ北海岸のサリーで、奴隷にされていたクルーソーがサリーを船で脱出中、たまたま行きあったポルトガルの船にあやまれて、乗組員にポルトガル語とスペイン語とフランス語で素姓を問われるが、全くその意味が理解できない。最後に、乗組員の1人であるスコットランド人にきかれて、ようやく事の次第を説明するといった工合である。クルーソーは語学どころか、自国語の語彙が貧弱であった。クルーソーは最初の航海で友だちの父親の船に同乗させてもらうが、その船がたまたま難船する。そのさい、乗組員が、「船が **founder** (沈没する)」と叫ぶが、クルーソーには **founder** の意味がわからなかった。

ガリバーはかなり器用であったが、器用さという点ではクルーソーも相当なものである。この点については、それぞれの漂流地での生活の工夫が裏付けになる。ガリバーはプロブディンナグで王妃の梳毛を侍女にとっておいてもらって、かなり貯えると、それで藤椅子をつくって王妃に献上したり、同じ髪の毛で王妃の名前を金文字で刺しゅうした財布をつくったりする。フイヌム国では椅子を二脚小刀でこしらえたり、ヤフーの皮を天火で乾して靴の裏皮に利用したりする。クルーソーは洞穴を掘ると、麻屑

を灯心にして、それに殺した羊の脂を塗ってロウソク代りにしたり、硬い木でシャベルや梯子をつくったりする。二人共、日曜大工の元祖のようなものだが、さらに二人が共通して、腕の冴えをみせるのは衣料品である。クルーソーは日光が強くて裸でいることができないので、獣皮で一揃いの服をつくるが、これは寒さよりは、むしろ暑さを凌ぐのが目的なので、故意にパクパクの服に仕立てる。その後、土人のフライデーを従えるようになってからは、フライデーのために山羊の皮で上着をつくってやったり、兎の皮の帽子をつくってやったりして、自分でも一人前の仕立屋気取りになるほど腕前が上達する。ガリバーはリリパットでは体にピッタリの服をつくってもらい、プロブディンナグでは慣れるまで窮屈な服をあてがわれ、ラプュータでは計算まちがいで、寸法の合わない服をこしらえてもらうというわけで、それまではすべて他人様のご厄介になり、自分でこしらえることはないので、腕の見せようがないが、フウイヌム国にいたってようやく、その腕前を発揮する。それまでつくってもらった服はすべて繊維製品なのだが、ここで初めて兎やヌーノという美しい動物の皮でつくるので、ガリバーにも腕のふるいがある。またガリバーは同じ動物の皮で靴下をつくったり、野生の麻を打ってカバーにし、手製のハジキで射落した鳥の羽毛を填物にしてフトンまでつくる。クルーソーもガリバーも器用さはたいへんなもので、甲乙つけがたい。

このようにみえてくると、クルーソーとガリバーは教育、妻子の有無、語学力では大きな差異があり、生立ちと器用さに類似点がみられることがわかる。この外、二人共それぞれ本来は医者、商人であって、根っからの冒険家ではないということも共通点の一つに数えられよう。

では、このような二人の男が漂流地での生活を通して、どのような人生観を抱くことになるのか。それを知る一つの手がかりは孤独感であり、もう一つの手がかりは宗教との結びつきである。

クルーソーはいわゆる「絶望の島」で廿八年を過すが、フライデーに会うまでの廿五年間は人間の声を一度も聞いたことがなかった。それまでクルーソーは文字通り孤独であった。それだけに、フライデーがクルーソー

の足を自分の頭の上に乗せて、奴隸的な屈従を誓っても、クルーソーにとってフライデーは奴隸どころか、人間としての交流をもとめるかけがえのない存在なのである。幸せなことにフライデーは柔順で、命の恩人としてクルーソーを敬うので、二人の間の信頼感は日増しに高まってゆく。そうしているうちに、クルーソーはフライデーの人喰い癖を止めさせるために羊肉のシチューを味わせたり、羊の焼き肉を食べさせたり、また意志の疎通をはかるために一心不乱にコトバを教え込んだりする。そしてクルーソーはフライデーという良き従僕をえたおかげで、一生を島で過してもよいという気持になる。ところがガリバーには、クルーソーが味ったような孤独感はない。ガリバーが訪ねる国々はすべて異様な国だが、フウイヌム国以外はどれも人間社会であって、しかもガリバーはそれぞれの国で得意の語学力を生かして、その国のコトバを積極的に習得しようとする。ガリバーのばあい、常に言語によるコミュニケーションがある。それにもう一つ興味深い相違は、余生を過してもよいと思う場所が、クルーソーのばあいは、前述の通り「絶望の島」だが、ガリバーのばあいはフウイヌム国という馬の国だということである。馬の国で、なぜ余生を過してもよいという気になったのか。それには徳性高い馬の国がどのような国か、ガリバー自身のことばをかりて、わきまえておく必要がある。

I did not feel the treachery or inconstancy of a friend, nor the injuries of a secret or open enemy. I had no occasion of bribing, flattering or pimping, to procure the favour of any great man or of his minion. I wanted no fence against fraud or oppression; here was neither physician to destroy my body, nor lawyer to ruin my fortune; no informer to watch my words and actions, or forge accusations against me for hire: here were no gibbers, censors, backbiters, pickpockets, highwaymen, housebreakers, attorneys, bawds, buffoons, gamblers, politicians, wits, splenetics, tedious talkers, controvertists, ravishers, murderers, robbers, virtuosos; no leaders or followers of party or faction; no encouragers to vice, by seducement or example; no dungeon, axes, gibbets,

whipping posts or pillories; no cheating shopkeepers or mechanics; no pride, vanity, or affectation: no fops, bullies, drunkards, strolling whores, or poxes: no ranting, lewd, expensive wives: no stupid, proud pendants: no importunate, overbearing, quarrelsome, noisy, roaring, empty, conceited, swearing companions: no scoundrels, raised from the dust upon the merit of their vices, or nobility thrown into it on account of their virtues: no Lords, fiddlers, Judges or dancing- masters.

(pp. 324-325 Chapter 10)

(友だちの裏切りや不実もなければ、秘かにもしくは公然と敵から危害をうけるということもない。大官やその輩下のご機嫌をとり結ぶために賄賂をつかったり、お追従をいったり、女衞をしたりする必要もない。詐欺や圧力から身を守る必要もない。ここには私の身体を台無しにする医者もいなければ、私の身上^{しんしやう}をつぶす弁護士もいない。金で雇われて私の言行を見張ったり、罪をデッチ上げて私を陥し入れようとする密告者もいない。ここには嘲弄する者も、誹謗する者も、陰口をたたく者も、スリも、追剥も、強盗も、三百代言も、女衞も、道化も、バクチ打も、政治屋も、もの知り顔の人間も、気むずかし屋も、退屈なおしゃべりも、議論好きも、強姦する者も、人殺しも、泥棒も、通人ぶった人間もいない。党派のボスや陣笠もいないし、誘惑したり、みずから模範を示したりして、悪をそそのかす者もいない。土牢も、斧も、絞首台も、笞刑用の柱も、曝し台もない。人を欺く商店主も職人もいない。倣りも、虚栄も、気取りもない。にやけた男も、弱い者いじめする者も、酔っぱらいも、街の女も、梅毒患者もいない。喧し屋で、色好みで、金使いの荒い女房もいない。馬鹿で傲慢な似而非学者もいない。おせっかいで、横柄で、喧嘩好きで、騒々しくて、怒号する癖があって、空っぽで、己惚れが強くて悪態を吐く連中もいない。悪徳行為のおかげで塵埃の中から成上ったゴロツキもいない。逆に、徳行のおかげで塵埃の中に投げこまれて、落ちぶれはてた貴族もいない。領主も、提琴弾きも、裁判官も、舞踏の教師もいない。)

しかし、ヤフーの存在がある以上、フウイヌム国はガリバーにとって、ユートピアではない。フウイヌムのような完全さにも、ヤフーのような獣性にも徹し切れないガリバーがなぜ、このような両極端を併せもつ世界に定住をもとめたか、不可解である。

神との結びつきはどうか。諸国遍歴中、窮地に立っても、ガリバーは神の助けをもとめることがない。暴風雨にあって船が真二つになっても、マスティフ種の犬くらいある敏捷で獰猛なネズミとの死闘で全身血みどろになっても、象ほどある猿の危害にあって、二週間床に臥す破目になっても、ガリバーは神に救いをもとめない。騒ぐと海へ投げこむと海賊に脅迫され、生命はないものとあきらめた時も、四十匹のヤフーに襲われて、樹幹を後楯に、短剣をふりかざして必死に防いだ時も、真裸で河で水浴中、牝ヤフーに抱きつかれた時も、神の助けを期待することはなかった。しかし、ガリバーは無神論者ではない。ガリバーはキリスト教徒（しかもプロテスタント）であったと思われる節がある。それは二艘の海賊船につかまって、オランダ人の海賊から手荒い扱いをうけた時、同じクリスチャンでプロテスタントだからお手柔かにしてほしいと嘆願するところや、大型のほうの海賊船の船長である日本人のとりはからいで、なんとか殺されずにすむと、キリスト教徒よりも異教徒のほうが慈悲心があると呟くところとか、さらには来日の時、なんとか手を尽して、踏絵を逃れるところなどから察せられる。聖パトリック教会の首席牧師にまでなったスイフトが、生命にかかわる数々の冒険をキリスト教徒であるガリバーに経験させながら、危地に立ったガリバーに神助を願うことばを一言を口にさせなかったのは、まことに奇異である。

これにたいしてクルーソーはどうか。クルーソーも、航海中暴風雨にあう時も、アフリカの蛮地で野蛮な原住民や獰猛な野獣に出あいかねない時も、「絶望の島」の沖合で溺死しかける時も、神の救いをもとめることはないが、孤島での生活中、肉体が衰えて、病苦に苛まれるようになると、クルーソーははじめて神に祈りを捧げるようになる。孤島での二年目の生活を迎えた一六六〇年七月四日の日記には毎朝毎晩、新約聖書に親しむよ

うになったと書いている。この期を境にして、クルーソーは敬虔なクリスチャンになる。そして信仰をもつようになってからは衣食住にわたって危険を感じることのない孤島での生活はクルーソーにとって悲しいものではなくなる。クルーソーは信仰によって救われるのである。これはガリバーとの大きな相違だが、ここで、なお注意すべきことは、人間の獣性にたいするガリバーとクルーソーとの見方の違いである。ガリバーはヤフーに体现されている人間一般の獣性に居たたまれない思いがするが、クルーソーはそうではない。クルーソーは野蛮人にのみ獣性をみとめる。人間同志その肉を喰いあう野蛮人の凄惨な姿をみて、悪魔そのものをまのあたりにみるような本能的な嫌悪をクルーソーは感ずる。したがって同じ人喰い人種であったフライデーにクルーソーは神の観念を教えこんで、なんとか蛮族の悪習をなくそうとするのである。

けっきょく、この事例からもわかる通り、ガリバーのばあいは、人間の獣性批判は人類一般におよんでいるが、クルーソーのばあいは、一部の蛮族が対象となっているに過ぎない。そして、新教主義と現実主義の体现者として、孤島での生活を冗長なまでに精細に記録している。このような批判の狭さと、委曲を極めた単調な生活記録がガリバーに較べて、クルーソーを大きくおとし貶めているように思われる。

注(1) 「ガリバー旅行記」と「ロビンソン・クルーソー漂流記」を中心にスイフトとデフォーの比較論を試みているのは、筆者の知る範囲ではつぎの三点である。

(i) 「社会的背景と小説の発想：スイフトとデフォーの場合」泉谷治「ユリイカ」一九七二年六月号。

(ii) Nigel Dennis; Swift and Defoe: From Jonathan Swift: A Short Character, pp.122-133. New York: The Macmillan Company and London: George Weidenfeld & Nicolson Ltd., 1964.

(iii) John F. Ross; Swift and Defoe: A Study in Relationship: University of California Publication in English, vol. 2; Berkeley, 1941.

(iii)は University of California, Berkeley に問い合わせたところ、out of print という回答だったので、筆者が目を通すことができたのは上記二点である。この二論文についての筆者の見解は更めて補注でのべる。

(2) John Arbuthnot [a:báθnət] (1667-1735)

医師。スイフト、ポープ、ゲイなどと交友があった。ジョン・ブル (John Bull) は彼の作 *The History of John Bull* (1712) から出たイギリス人の異名。

(3) John Gay (1685-1732)

劇作家。スイフトに勧められて書いたといわれる *The Beggar's Opera* (1728) はロンドンで六十三日間続演の後、地方巡業では三十日ないし五十日間続演されて、各地で好評をえた。第一次大戦後、ロンドンのハママアスミス・リリック座における上演は空前の大成功で、一九二〇年から三年間続演された。

(4) H. J. Bolingbroke

政治家。晩年政界を離れて哲学の研究に専念。ポープは彼に勧められて *An Essay on Man* (1733-34) を書いたといわれている。

(5) Houyhnhnm は馬のいななき whinny を模したスイフトの造語であるというのが多くの研究者の見解である。

補注

(i)について

「社会的背景と小説の発想」と題する泉谷氏の所論は、作品に即した比較論ではない。氏はつぎの三点から比較を試みている。

(イ) スイフトとデフォーが活躍した当時の社会的背景。

(ロ) スイフトとデフォーの社会的レベルでの活動とフィクションとの関係。

(ハ) イギリス小説史で二人が占める位置。

(イ)については十七世紀後半から十八世紀前半にわたる急激な政治変革と激動する社会情勢を概括している。

(ロ)が本論の骨子で、(イ)の状況下でデフォーとスイフトがどのような社会活動をし、それが両者の創作活動にどのように反映されているかを、フィクションの主人公(ロビンソン・クルーソーとレミューエル・ガリバー)を通して解明しようとしている。しかし氏の意図とは別個に当時の社会的背景やデフォーとスイフトの社会活動がその創作にどれほどのかかわりをもったか、その分析が曖昧で要領をえない。氏の所論でとりわけ不可解なのはクルーソーと神との結びつきである。氏はクルーソーと神との関係は精神的な深まりとしてはあらわれず、物質的なレベルに還元されているといい、その裏付けとして、父の諫言もきかずに船出して嵐に遭ったクルーソーが当座は自身の暴挙を悔いるが、嵐が去ると神の怒りを忘れてしまうこととか、一六六〇年一月三日のクルーソーの日記に誌してある事項を引合いにだしている。この日付けの日記によると、クルーソーは、たまたま、その日、食糧をもとめて歩き廻っていた時、大麦と稲が生えているのに気づき神に感謝する。ところが、その場所でクルーソー自身が以前に鶏の餌の袋をはたいたことを思い出して、神への感謝の気持が薄らいたという話である。しかし、このような事例で、クルーソーの信仰が表面的であったとはいいきれない。すでに本文中で指摘したように、クルーソーはこの時点ではまだ、本物の信仰はもたず、苦

境に立っても神の助けをもとめることはなかった。クルーソーが敬虔なキリスト教の信者になるきっかけは、^(おこり) 烈しい瘧の発作が出て一切飲食ができず、寝たきりの生活を送るようになる時で、その間の事情は同年六月廿七日の日記に詳しい。クルーソーはこの日、生れて初めて心から神助を願った。そして七月三日、どうやら身体が回復すると大地に跪き声を上げて神に感謝するのである。七月四日以降は毎朝毎晩、聖書に親しむようになる。九月三十日には柱に刻んだ刻み目から孤島に着いて三百六十五日目であることを知り、クルーソーはこの日を物忌みの日に決めて神に祈りを捧げることにする。そして日没迄の十二時間一切の飲食を断った後、ビスケット一枚と一房の乾ブドウを食事として再び祈りを捧げて床に就く。

以後、神への感謝の念は変わらない。人喰い人種のフライデーを従僕にしてからは信仰への熱意はさらに高まり、聖書の教えを日夜説いて、苦心の末、フライデーをキリスト教徒に改宗させる。クルーソーはこの行為を通じて、一人で読むときよりも却って聖書に親しめたことを知る。そしてクルーソーは改倭と神への感謝の念ではフライデー共々、どんなキリスト教徒にも劣らないとまでいいきるようになる。その後、廿八年住んだ孤島を去って故国に帰り、経済的にも恵まれるようになるが、彼の信仰が揺らいだ形跡はない。「キリスト教の神が主人だったのに、いつのまにか、富の神マモンに仕えていたという新教徒の歴史的アイロニー」という評言はクルーソーにかんしては必ずしも当たらないのである。

(i)は十八、九世紀英文学ハンドブック(南雲堂)のデフォーとスウィフトの項で詳説してあるWalter AllenやIan Wattの所説の簡略化で氏の見解らしきものは見当たらない。

(ii)について。

氏はスウィフトとデフォーの政治上の立場や諷刺家としての位置から、両者の類似点と相違点をとりあげ、後半で、ガリバーとクルーソーに絞って、約10項目に亘って比較を試みている。氏はその結論として、スウィフトは大衆を愚弄するため、デフォーは大衆をたのしませるために、それぞれ冒険譚を書いたといっているが、クルーソー自身が述べている刻明な漂流や孤島での生活記録を軸に氏が挙げた比較項目からはクルーソー漂流記に大衆をたのしませる要素は見当たらない。たとえば、氏の指摘のごとく、ガリバーは一般の旅行記が詳述する衣食住にかんする記述を軽んじて、むきだしの裸身のみせつけるが、クルーソーは単調な衣食住の記述に飽くことがなくて、人間の裸身には全く興味がないかのようである。ガリバーは時には唯物的で、極めて肉体的だが、クルーソーは唯物的で極めて非肉体的である。

また、比喻とりわけ直喩の面からみると、事実を空想の跳躍台とするがガリバーは人間の手足や、周囲の生き物や、親しみ深い事物をつかって比喻を躍動させるが、単調な事実を積み重ねるクルーソーには、このようなたのしきはみられない。

い。

大衆をたのしませる要素も、むしろガリバーに多くみられるのである。氏の結論の齟齬を指摘せざるをえない。全く無味乾燥と漱石も極めつけているクルーソーのこの漂流記が、なぜ十八世紀の読者にうけたのか、この点は一つの大きな研究課題になろう。

参 考 文 献

泉谷 治：「社会的背景と小説の発想スウィフトとデフォーの場合」「ユリイカ」1972年6月号。

Nigel Dennis : Swift and Defoe : From Jonathan Swift : A Short Character, pp.122-133. New York : The Macmillan Company and London : George Weidenfeld & Nicolson Ltd., 1964.

Jonathan Swift : Gulliver's Travels, The Penguin English Library, 1972.

Daniel Defoe : Robinson Crusoe, The Penguin English Library, 1971.